

国立大学法人横浜国立大学 学長業績評価 評価書

平成30年7月30日
国立大学法人横浜国立大学
学長選考会議

1. 学長業績評価にあたって

国立大学法人横浜国立大学学長選考規則によれば、学長の在任期間が3年を経過したときに、学長の業績評価を行うことが規定されている。学長選考会議は、長谷部 勇一学長に対して、学長就任後に開示された「所信表明」及び「学長ビジョン2016」に照らし合わせ、在任期間における学長業務の実績に係る「自己評価」と残任期間に取り組むべき重要課題について、明確な根拠に基づいた資料の作成を依頼した。2018年6月22日に開催された学長面接では、学長から提出された自己評価に係る資料について、学長と学長選考会議委員との意見交換を行った。学長選考会議はこれらを総合的に捉えて「学長業績評価書」を取りまとめた。

2. 評価

1. 大学運営

大学運営については、ガバナンス改革及び組織再編が重点的に進められた。その実績は顕著であり高く評価される。

ガバナンス改革の主な実績は、

- ① 部局長、学部長の学長指名制の導入、
- ② 教員活動報告の実施、
- ③ 経営戦略会議と大学運営会議の設置、
- ④ 若手教職員との対話である。

組織再編の主な実績は、

- ① 都市科学部の設置、
- ② 学部・大学院の改組、
- ③ 大学院教育強化推進センターの設置、
- ④ 地域連携推進機構の設置、
- ⑤ 法科大学院の学生募集停止である。

財政改革アクションプランについては、教職員の不補充が実施された。本学の財政状況からやむを得ない点も多いが、教育力・研究力の低下を招かないような工夫が求められる。

2. 教育

教育について改革的施策が実施されたことは高く評価される。主な施策は、

- ① 教養教育改革（全学共通のリテラシー科目の導入、高年次教養科目の導入）、
- ② グローバル教育改革（より効果的な英語教育の実施、海外インターンシップの実施）、
- ③ 国際共同教育の推進（ダブルディグリー推進の基礎作り）、
- ④ 実践的教育の推進（課題解決型プログラムの導入、地域実践教育研究センターの各種取組）である。

この時点で成果を問うのは酷であるが、目指している全体像をアピールしていく必要があるのではないかと。また、文理融合やグローバル化に加え、理工系の視点が強化されることも期待されている。

3. 研究

「リスク共生学の拠点」として先端科学高等研究院が拡大強化された。一方で、全学の研究を推進するために、「YNU 重点支援拠点」が選定され、学長裁量経費により、「若手研究者の支援」を行ったことは評価できる。

しかし、実践性を強調するあまり、基礎科学や人文系の研究を行っている教員の活動を軽視する雰囲気を作らないように配慮する必要がある。

また、「横浜経営者の会」を立ち上げて本学と産業界との連携を強化したことは高く評価できる。

今後、地元企業にとどまらず、グローバルな企業や研究機関に視点を広げることを期待したい。

4. 国際・地域

地域交流については、学長リーダーシップのもとに、自治体、企業、大学等との包括連携協定の締結が進み、具体的な事業が次々と展開されていることは評価できる。

国際交流については、「学長のトップ外交」による新興国を中心とした有力大学との国際交流の展開、海外連携大学でのブランチオフィスの開設や、近隣大学との協働で行われる留学生就職支援事業の実施など、グローバルとローカルを結ぶ活動を展開したことは評価できる。

こうした活動が、国際都市横浜の横浜国立大学のブランディングに効果を発揮するよう期待したい。また、本学学生が留学を希望する大学、特に英語圏の大学との連携を進める必要もある。

5. その他（卒業生、ダイバーシティ、社会連携）

- ① 校友会活動を活性化させ、全学的な大学支援体制を進めていること、
- ② キャンパスのバリアフリー化の推進、
- ③ 学長裁量枠による女性研究者の採用は評価できる。

さらに、他大学、特に国公立大学と連携を強化して、具体的な活動につながることに期待したい。

3. 全体に対する評価

長谷部学長の就任当初、本学の大学ガバナンス改革は、他大学に比べ遅れをとっていたと言わざるをえない状況であった。しかし、長谷部学長は「学長ビジョン 2016」を示し、大学ガバナンス改革、教育戦略、研究戦略、国際・地域連携を柱とした方針を明確にした。就任当初には想定外のトラブルや大学構成員との意思疎通に苦慮し、大学運営にスピード感が欠けていたようにも思われたが、「学長ビジョン 2016」の実現に向けて学長リーダーシップを発揮しつつ、学長業務に係る実績を着実に積み重ねてこられた。

横浜国立大学は国際都市「横浜」にある国立大学であり、その特色を鮮明にして、ローカル・グローバルに躍進することを謳い、学長のトップ外交を強化されてきた点は高く評価できる。また、文系・理系の部局が同じキャンパスにあるという利点を活かして文理融合教育を実現することを目指し、都市科学部の設置を実現したことは大きい。全学の文理融合教育の実現には残された課題も多い。大学教育強化推進センターなどを活用した今後の展開に大いに期待したい。

以上のことから、

長谷部 勇一 学長の業績は

「期待する程度を上回った」と評価する。